
だれも聞こえない新鮮な香。だれも見えない深遠な味。

まいまい？

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

だれも聞こえない新鮮な香。だれも見えない深遠な味。

【Nコード】

N7037H

【作者名】

まいまい？

【あらすじ】

「もう、いいかい？」

暗闇に響く声。それが、始まりの合図。祭りのはじまる時間。

現世と幻世の挟間の少し詩的なホラー系？

第1 / 幻夜祭

「もう、いいかい？」

暗闇に響く声。それが、始まりの合図。祭りのはじまる時間。ほんのひととき、月が地球の影に隠れる時間。

月蝕の間の幻夜祭。

夜の闇の屋根の空の

遠くの山のビルのネオンの

飛行場の光の

公園の森の土の

噴水の音の匂いの

雪の月の光の

ひとりの秘密の場所の空気の

闇の影の中の朱色の瞳の

夏のあの日の朱い夕焼けの日の。

祭りの夜の神社の稲荷の仮面の。

灯りの光の屋台の玩具の人形の。

二人の人の兄弟の繋ぐ手、歩く足の。

光と闇、生と死、人と物、境界のあやふやな内と外の祭の。

それは、現実のものなのか、人のこころの生み出す空想の産物なのか。

闇夜に染まる前の、夕闇のまどろみのように不完全な。

今夜は、祭り。

夏の祭り。

相反する闇と光が入り混じる空間は、何もかもを曖昧にしてしま
う。

時として闇は光に擬態し、光は闇に転じる。

何が正で、何が偽か、何もかもが、交じり合い、もはや解らない。

それは、静かすぎる暁闇の夕暮れに浮かぶ、不安定な、不安定な
月。

揺れる、揺れる月の色。

たゆとう夢ノ中。

子供の声であふれ光かがやく昼。

木のベンチ。

砂場。

鉄のスベリダイ。

人気のない夜の噴水は水鏡。

夏のおまつり。

おはやしの音が、聞こえてくる。

夏の祭りが、始まる音。

月の欠ける音。

不思議な不思議な月の陰。

はじまる、祭り。

夏の祭り。

第2 / 隠隠鬼の仮面

暗闇の中、何もない舞台の上に、少年はいた。
古くて黒色のラジカセを持った、キツネ面をかぶった少年は空を見上げている。

「月が、かけていく……」

今日は、月蝕。

地球の影につきが隠れてしまう夜。

少年は、スイッチを入れる。

そこからは、カセットが回る乾燥した音しかない。

音楽のなるようなものは、入っていない。

ただただ、回っている。

から回り。

「だれも聞こえない新鮮な香。その中でしゃべらない機械仕掛けの子供は生まれ、無邪気に遊ぶ」

椅子の上には、白い人形が置かれている。人の形をした、白い布を切り取った人型の。

「だれも見えない深遠な味。その中で、見えない球体関節人形の子供は育まれ、邪悪に戯ぶ」

鬼の手の中に、かわいい二つの人形がある。

「隠隠鬼は永遠の子供、成長したくないしない闇の中をサマヨウ。たくさんの人形と共に」

光と闇の時間が終わるとき。人形たちは、記憶をなくし、再び目覚める為に、眠りにつく。

くりかえされる、繰り返される事象。

子供でいたい鬼。

終わらせたくないあそびの時間。

鬼の誘惑に、あそびも忘れ、目を醒ます。

自我を持ち、その地で生きていく。

しかし、自我を持った子らは、

遊びを忘れ、

鬼を忘れ、

全て忘れ、

鬼はいつも、最後には独りだけ。

夢へ戻ることも、現実へ覚めることも、できない。

いつまでも、いつまでも、くりかえす、くりかえす。

からから、からから、空回り。

キツネ面の少年は、暗闇の底へ消えていく……

月は、もうすっかり闇の中。

> i 2 0 4 3 — 3 1 2 <

第2 / 隠隠鬼の仮面（後書き）

挿絵：隅の人様作。

第3 / まあだだよ

「もう、いいかい」

鬼は言う。

「まあ、だよ」

子供たちの声が、きこえる。

かくれんぼが始まった。

「1、2、3、4、5……」

鬼は、再び数を数え始めた。

暗闇の中、数人の子供たちが、走る気配がする。
そして、そのうち、しずかになった。

ひそひそ声が聞こえる。

「ここなら、見つからないかな」

アルファは言う。

「たぶん」

ベータは、「しいつ」と口の前に人差し指をそえる。

「本当にここに隠れて良かったのかなあ。大人に見つかったら……」

「大丈夫、大人は、皆、外の祭りに夢中だから、ここには来ない」

外は祭り。にぎやかな音、騒がしい声が今もここまで聞こえている。

「それにしてもここは暗いね」

ここは誰も知らない秘密基地。しかし、大人に見つかり、怒ら

れる場所。鬼にも、大人にも、見つかつてはいけないスリル。

アルファ懐中電灯を点ける。あごの下から顔を照らす。

「うらのめしや！」

……沈黙に支配された。

「やると思った」

「……鬼、来ないね」

「ああ」

「外、祭りだね。様子見てこようかなあ」

アルファは、祭りの心躍る音、響く音楽に誘惑を感じていた。

「やめとけ」

「どうして？ 行っちゃ駄目って、言われているから？ そんなのおかしいよ。外の祭りは楽しそうだよ。こんな暗い処で、じっとしているのは飽きたよ」

「どうなっても知らないぞ」

アルファは、ベータを置いて外に出た。橙色の灯りが、世界を染めている。

再び暗闇に包まれる秘密基地。

「戻ってこられなくなったら、どうするんだ？」

ベータは誰に言うでもなく、ひとりつぶやいた。

第4 / 突撃インタビュー

華やかな音楽が、黒いスピーカーから流れている。パイプ椅子がいくつも並び、人々がまばらに座っている。

アルファはあいている客席に座り、人々の様子を観察した。みんな、同じ格好、同じ顔。だれがだれがだれなのか、さっぱりわからない。

突然客席が照らされた。どこからともなく、急に現れたアナウンサーが、突撃インタビューを始めた。

「ハイ、こちら只今、お祭りの現場より生中継致しております。わたくしこと、名アナウンサー「安達」は、今日も元気で、ハイ、仕事をしております。それでは、芝居が始まるまでの間、皆様方に今日の感想を聞いてみましょう。ハイ、あなた」

客の一人に、マイクを向けた。

「一言で良いので、感想をどうぞ」

「.....」

突然のことに惑いながらも、観客の一人は答えた。

「ハイ、ありがとうございます。それでは、次の方にも聞いてみたいと思います。ハッキリ言って、どうでしょう？」

「.....」

マイクを向けられたが、何をいつたらいいいのか分からないらしく、黙っている。

しかし、それは、想定のうち。

名アナウンサーは、こんなことでは、困らない。さっさと切り上げてしまうのだ。

「ハイ、分かりました。貴重な意見、ありがとうございます。最後に、もう一人お願いしましょう。そのあなた」

客席に座っているアルファにマイクが向けられる。

「その、変わった服のあなたです。どうでしょうか？」

「……あ、まだ、来たばかりだし……う……ん？」

何の前触れもなく、停電のようにばちんと、電気が消え、闇に包まれる。

マイクの音声も切れた。

暗闇、無音。

どたばたと、スタッフが走る音がする。何かトラブルがあったらしい。黒い服を着た大人、黒子が、ペンライトと拡声器と共に現れ、アナウンサになにやら耳打ちし、去っていく。

「あー、只今、照明担当より、停電中という情報が入りました。すぐに復帰すると思われるので、少々お待ちください。あー、只今、停電中という……」

何が起こったか繰り返し、情報を流していた。

第5 / 蓄光テープの蛍

ここもまた、暗闇に包まれている。

「蓄光テープの光が、眩しいなあ……」

デルタは、所々に張ってある、黄緑色の光を見ている。無論、まぶしいと言うほど、光は放っていない。これは、暗い所でじっとしているのは嫌だ……と言う感情によって導き出される、皮肉である。

「蛍の光みたいで綺麗じゃない。私、好きよ」

ガンマは、デルタに寄り添う。

「夏の三角形も、ずいぶん、西のほうに傾いたね」

月の光はなく、停電中の今、星空が良く見える。

「皆は、まだかくれんぼしているのかしら？外では、せっかく祭りをやっているのに、あんな暗いところで、やってられないよね」

ガンマの言うことも、もつともである。

「でも、祭りに行っちゃいけない理由、あるんじゃないかなあ？」

理由は分からなくとも、いけないといわれていることは、いけないと思うデルタ。

「ただのいじわるだよ。子ども扱いしてさ、私たちに、祭りに行かせない為にあんな怖い話を言っているだけだよ」

「でも、昔、本当に祭りに行って戻ってこなかった子が……」

「そんなの、怖がらせるための嘘よ。噂よ」

「そうだと良いんだけど」

「そうだよ。気にすることないって。行こうよ」

デルタの手を引く、ガンマ。

「うん……人がいっぱいいれば、隠れるのに丁度良いしね」

デルタは、自分の納得する言い訳を、考えた。

「……それにしても、もう、ずいぶん秋になったねえ」

夜の虫の声は、もうすっかり秋の音だ。

「そうだね。あ、流れ星」

ガンマはそらを指す。

「え、どこ？ああ、願い事、願い事……ええと、なまむぎ、なまむぎめ、なまたまご……」

デルタは、早口言葉を、3回言った。

「今、誰かがこの世界から、消えたのね……」
ガンマは、ささと歩き出して胃しまう。

「あ、待つてよ。置いていかないで……」

第6 / 月蝕の宴

電気と音楽が復歸し、『にぎやか』に包まれる。

「あ、只今、電気が復歸したようです。では、先ほどの続きを……」
アナウンサが、再びマイクを向けると、そこにアルファの姿はなく、代わりにアルファと同じ服をした白い小さい人形があつた。

「人形……？」

アナウンサは、不思議そうな顔をする。椅子の上に、残された人形。

「……さて、ここで問題です。この人形は、誰ののでしょうか？ お電話はこちら……0120-1、2、3、4、5、6、7、8、9、10！ まで！ 携帯電話、PHSからも、かけられます」

アナウンサが言つと、あちらこちらから、電話のコール音がする。たくさんの問い合わせの電話が、鳴り響いている。

「お電話、ありがとうございます。たくさんの、お電話お待ちしております
おります」

アナウンサは、鳴り響く電話の音にあわせ、踊りだす。それは、奇妙な動き。不気味なダンスにあたりは無音に包まれる。アナウンサが変な動きをしたばかりに、電話音ばかり、消えてしまった。
「……只今、電話がつながりにくくなっているようです。さすが、祭り会場！電波が弱い。……というか、電波は関係ない」

ふつつなら、もつと『問い合わせ、苦情』の電話が増えるはずだろうと、アナウンサは思ふも思惑通りに行かない。

再び沈黙に包まれる。

黒子が現れ、「CM」と書かれた板を持ってきた。こういつときは、それでごまかすのだ。

「はい、ここでCMです」

花畑にチヨウチヨウが舞うような音楽が流れ、世界は宣伝の声に包まれた。

第7 / 幻覚の舞台

何もない舞台上、少年がいる。

「君は何？」

少年はデルタの匂いをかぐ。

「……何とは？」

「木でも草でも花でもない」少年は首をかしげた。「石でも、霧でも……人形でも？」

そう少年はこのとき初めて、それを見たかのよう^{にんげん}。

「一緒に、行こうか？」

デルタは少年に手を差し出す。

「外？ 外の世界……ふしぎだから、ついていく。見つけたから、ついていく」

少年はその手をそっと、つかむと優しく微笑んだ。

そして、舞台の明かりは消えた。

舞台の下で、人を探してる。

「あらあら、はぐれてしまったわ」

暗闇のせいで、ガンマは、デルタとはぐれてしまったらしい。ガンマは、人ごみの中、同じくらいの子を見つけ、話しかける。

「ちよいとその人？人を探しているんだけど、目がうによーで、腕がふりよーで、こんな人見かけませんでしたか？」

意味不明なジェスチャーをしているが、かるうじて男の子だと言うことは分かった。

ベータは、首を振る。

「君も祭りに行くのかい？」

「ええ、かくれんぼは、もういいの。だって、せつかくの祭りなのに、こんな暗い処で、じっと隠れていなくちゃならないのは、おか

しいわ。外は、こんなにも楽しそうな音がするのよ。あなたも、こんな暗いだけの世界にいないで、外に出たらどうよ」

「そうだね」

「私は、もう行くね」

ガンマは軽い足取りで、人ごみの中に去っていく。ベータは、そんな後ろ姿を見送る。

「みんな、もう手遅れだ……」

鬼がいる。

鬼が来る。

どこかに、どこから。

「ドラキュラは朝日を浴びると灰になる。人魚姫は恋が実らないと泡になる。僕らは鬼に見つかれば……」

ベータは、ひとり暗闇を歩いている。一人、呪文のように、言葉を発している。

第8 / もういいよ

「只今、祭りの現場からお伝えしております」

黒子が人形を二つもってくる。それは、ガンマとデルタと同じ服を着たかわいい人形であった。

アナウンサは、黒子からそれを受け取り、先ほどの人形の横に置いた。3体の人形がここに集う。

「僕らは鬼に見つかれば」

ベータは空を見上げ、つぶやいた。

「人形……？」

黒子から手渡され、アナウンサーはそうつぶやいた。アナウンサと、ベータの声が重なった。

再び電気が消え、暗闇が襲う。

「今日は本当に停電が多いね。電気使いすぎなんじゃないの」
祭り客の男の声。

「この作為的な闇。迷い込んだ幻には、出口はない。あるとすれば……」

「それにしても、空が綺麗ね」
祭り客の女の声。

「もう手遅れだよ。みんな……」

「あ、流れ星だぞ」

「ん？ あ、消えちゃった……」

男と女の声。

「あーあー……停電といったハプニングがありました、皆様は楽しんでるようです。えーあー、以上、暗闇の大祭りの現場から、中継でお伝えしました」

アナウンサは、客の人ごみの中に混じり、もうどこへ行ったか分からない。

月の光が、点いた。

地面に散らばる、たくさんの人形たち。男も女もすべて白い無地の人の形で形どっている。その中に、ベータと同じ服を着た人形も紛れ込んでいた。

「……6、7、8、9、10。もういいかい？」

鬼は言うが、誰も答えない。何も聞こえない。鬼は散らばった、人形を拾い始める。

「さあ、かくれんぼしようか。新しい仲間がこんなに、たくさんいるしね。……じゃあ、数えるから隠れて。でも、外の祭りに行っちゃ駄目だよ。いなくなった子が、たくさんいるから。本当にたくさん……」

隠々鬼は、再び数を数えだした。

「1、2、3、4、5、6、7……」

第9 / 終わらない、鬼の数え歌。

ここは、僕だけの場所、
皆でかくれんぼをした場所、
屋台で買った思い出の残骸がたどり着き、
飛んでいってしまったヘリウム風船が、
ゆらゆらと彷徨う場所、
ただ忘れられていくだけの、場所。

僕は知っている。

この場所が、創られた世界だってことを。

創られた祭りにまよいこんだ人間は……
そのことにも気がつかず。

何回も見る悪夢のように終わり、
二度と帰らぬ過去のように繰り返す。

夏のおまつり。

おはやしの音が、遠ざかる。

夏の祭りが、終わる音。

月の満ちる音。

不思議な不思議な月の光。

終わる、祭り。

夏の祭り。

そして、

そこには、

狐の仮面がひとつ落ちていただけ……

第9 / 終わらない、鬼の数え歌。 （後書き）

文化祭のときにやる芝居用に書いた台本を、小説風にしたので、無理があつたかな。モノの言い回しとか。

子供の頃、神社のお狐様の石像や変な形の石像の周りをくるくる回るのが好きでした。

なんか、思っていたよりも1周が長く感じたので、不思議だったのです。

もしかすると、3歩分くらい、異世界を歩いていた可能性がありません。

まあ、ただ単に、目を回していた可能性もありますけどね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7037h/>

だれも聞こえない新鮮な香。だれも見えない深遠な味。

2011年11月16日11時58分発行